

宗達とその工房絵師による物語絵創作の視点

大阪芸術大学 美術学科 教授 河田昌之

江戸時代前期（17世紀）の画壇で独創的な作風を打ち出し、現在でも高い評価を受けているのが俵屋宗達である。宗達とその一門によって制作された作品のなかで、源氏物語や伊勢物語を題材にする物語絵は既存の作品の学習を経て、斬新で表現力に溢れた宗達の世界を構築している。しかし、現在の宗達研究ではそれらの作品を対象にした探索も進んでおらず、やや等閑視されている感が否めない。宗達もしくはその一門による源氏物語、伊勢物語などを題材とした物語絵には、同時期に活躍した土佐派や狩野派、あるいは岩佐又兵衛に代表される岩佐派のそれらと比較すると、一家を成した絵師による個性的な作品であることがよくわかる。本研究ではそのような創作に昇華させる要因を「宗達の視点」として捉えるための基礎的研究を担う作品探索と場面の読み取りを主にした。

宗達が当主の俵屋で作られた扇絵が人気を集めたことは江戸時代初期の仮名草子『竹斎』に述べられており、その絵は源氏物語を題材にした源氏絵であった。申請者は評判を取った宗達が源氏絵について早くから関心を寄せ、なかでも現在断簡として美術館ほかに蔵される全54段を描いた団家旧蔵（団家本）「源氏物語図屏風」（6曲1双）と藤井家旧蔵（藤井家本）「源氏物語図屏風」（8曲1隻）を復元し、それぞれの全体像を明らかにして、源氏絵制作における宗達による物語解釈と表現を明らかにすることを目標にして、作品探索を進めてきた。団家本は宗達とその一門による54場面が揃った唯一の源氏絵である。未確認の段があるが現存するうち約20点を申請者が主体となって開催した特別展「宗達―物語の風景 源氏・伊勢・西行―」（和泉市久保惣記念美術館 2023年）において展示した。団家本の断簡をまとめて展示したことは前例がなく、今後の研究にいささか寄与できたのではないかなと思う。一方、宗達の物語絵として知られ研究も進んでいるのが色紙形に描かれたいわゆる色紙形伊勢物語絵である。申請者は現存する59場面を国文学の研究者との共著で『宗達 伊勢物語図色紙』（思文閣出版 2013年）として刊行しており、伊勢物語図色紙も同特別展で約半数を展示した。併せて宗達と鳥丸光廣が制作した渡辺家本「西行物語絵巻」（文化庁蔵）を初め、宗達による毛利家本、津軽家本「西行物語絵巻」の断簡も加えて、源氏物語、伊勢物語、西行物語を扱った宗達の物語絵を比較し特徴や意義を考える手が見出しことも意図した。したがってこの展示は申請者にとって、源氏絵や伊勢物語絵、西行物語絵という宗達筆として捉えられる主要な作品調査を踏まえて、絵画の題材となる物語などのテキストが時代的に、また絵師の思考や流派の伝統によってどのような造形物になるのか、そこに美的な価値や創造性が見出せるのかを考えていく上で貴重な機会となった。

宗達とその一門による源氏絵や伊勢物語絵、西行物語絵の研究の基礎となったのは、申請者も参加して継続してきた伊勢物語絵研究会の活動である。その成果は『伊勢物語絵巻絵本大成』（角川学芸出版 2007年）

で、伊勢物語絵の主要な作品を網羅して構成した。源氏物語と伊勢物語の受容史を踏まえた作品研究が宗達の伊勢物語図色紙であり、本研究の源氏物語図屏風なのである。

宗達に関する総合的な研究は、すでに山根有三氏らによる『琳派絵画全集』（日本経済新聞社 1974年）、また村重寧氏、小林忠氏監修の『琳派』（紫紅社 1992年）が刊行されている。これらは琳派の絵師を対象にした包括的なシリーズなので取り扱う作品数も多い。そのなかで団家本や藤井家本も取り上げられているが断片的な解説にとどまる。近年の源氏絵研究では絵巻や屏風、色紙や扇面を含め新しい作品が多く紹介されているが、団家本、藤井家本は屏風絵としての構成や場面解釈に及ぶ研究は足踏み状態で、宗達の作家研究や物語絵研究にのつての弱点となっている。

本研究では申請者が継続して行ってきた団家本、藤井家本の断簡の探索を進めることで、団家本は54場面のうち31場面、藤井家本は17場面のうち8場面の現存が確認できた。両本とも、断簡に改装される前の屏風時の状況を確認できるモノクロ図版が残されている。団家本はA3版の図版（『宗達画集』日本美術協会編 審美書院 1913年）、藤井家本は『琳派絵画全集』ほかである。本研究では場面数の多い団家本の探索と場面解釈に力点を入れた。

団家本の概要を記す。6曲1双の大きさは、142.6×323.2cm。左右隻とも向かって右第1扇上から第6扇下にかけて絵は物語の章段順に配される。右隻は1「桐壺」～30「藤袴」の30段分が各扇に5図当てられ、左隻は31「真木柱」～54「夢浮橋」の24段分が当てられるが、第3扇からの章段配置はイレギュラーである。右隻第1扇の3「空蟬図」と左隻第6扇の54「浮舟図・夢浮橋図」に宗達とその一門の制作であることを明らかにする朱文円印「伊年」が備わる。

土坡や屋根、雲霞に補筆や補彩が認められるものの、構図や人物配置を通して大半が既成の図様であること、そのなかに独自場面もあることが判明した。既成図様に独自場면을散らして屏風を組み立てる手法は、過去の作品の学習と新しい図様の創作という宗達による作画姿勢の特徴で、この点でも団家本は宗達の作品として位置付けられる。団家本は江戸時代前期の土佐派源氏絵や室町時代後期にさかのぼる色紙形や扇面形の源氏絵、さらには平安時代後期からの系譜に入る源氏絵を学習しながら新しく創作したもの、モチーフの追加や省略、置き換えや関連する出来事を併せて描いている。従来は絵画化の対象にされていなかった新しい場面が生まれ、既成場面と交差させて源氏絵の図様をゆるやかに改変させることで絵としての魅力を創出したことが団家本の構図や独自場面の読み取りから指摘できる。

本研究を発展させ、宗達の「創作の視点」を浮かび上がらせることを今後の課題としたい。